

家庭・学校の連携による教育的なニーズに対応した指導・支援Ⅱ —「連絡帳」の活用—

中川 宣子

(京都教育大学附属特別支援学校)

Instruction and support in collaboration with families:
A content utilization of home-school communication notebooks

Noriko Nakagawa

2012年11月30日受理

抄録：本研究の目的は、特別支援学校において、家庭と学校とでやりとりされている「連絡帳」の記述内容を分析し、その内容の構成を明らかにした上で、「連絡帳」が子どもの何を把握し、それが指導・支援にどのように活用できるかについて考察する。「連絡帳」には、日々の子どもの起こった出来事や、その出来事に対する保護者や教師の捉え方が相互にやりとりされ、心理的な変化についてもありのままに記述されていた。連絡帳は修正版グランデッド・セオリー・アプローチを用いて分析され、保護者の記述内容では27個の概念から9個のカテゴリーを見だし、教師の記述内容では29個の概念から10個のカテゴリーにまとめられた。この結果から、「連絡帳」が単なる事務連絡としての機能だけでなく、①子どもの日々の生活実態をより正確に把握するための記録として、②家庭と学校が連携して指導・支援していくためのツールとして、③保護者や教師を支援する方法を見出すツールとして活用できることが考察された。

キーワード：特別支援教育、「連絡帳」、家庭・学校の連携、子どもの生活実態

I. はじめに

特別支援教育では、子どもが学習や生活上の困難を克服し、よりよい成長・発達をするために、家庭と学校、関連機関との連携によるチーム支援が行われている。特に家庭と学校、つまり保護者と教師は、日々密接な連携をとっており、面談、学級・個別懇談会、電話連絡、学校・学級だより、連絡帳と様々な機会を設けて、互いの情報交換・情報共有を行っている。その中でも、ほぼ毎日、保護者と教師がそれぞれに、子どもの様子や、その時の捉え方等を記録する「連絡帳」が果たす役割は大きい。

「連絡帳」の意義について、宮武ら(1989)は、教師に対するアンケート調査から、①親との感情的な交流を作る、②子どもの情報を交換し合う、③指導の一貫性を築く、④記録として等を挙げている。と同時に、「連絡帳」が最終的に家庭に保管されることから、単なる家庭の記録にとどまっていることを課題としてあげている。

このように「連絡帳」は、単なる教師と保護者との事務的連絡手段としてだけではなく、①教師と保護者との信頼関係、②指導の連携と一貫性、③指導技術の向上、④指導記録、⑤発達の記録、⑥評価の情報、⑦成果の伝達といった多角的な機能が考えられ、これらの内容は、子どもの指導・支援において大いに活用しうる内容である。

そこで本研究では、現行の「連絡帳」の記述内容を分析し、その内容の構成を明らかにした上で、「連絡帳」が子どもの何を把握し、それが指導・支援にどのように活用できうるかについて考察する。

II. 方法

1. 質的研究法の選択

本研究では、質的研究法の中でも、データに密着し分析するグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach 以下 GTA と略) を参考にした。GTA は、ある現象に関して、データに根ざした帰納的に引き出された理論を構築するための体系化した一連の手順を用いる質的研究の一方法論 (Strauss & Corbn,1990) であり、グレイザー版、ストラウス版、ストラウス・コーピン版等がある。本研究では、“修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach) (木下, 1999,2003,2005) (以下,M-GTA と略) を用いた。M-GTA はデータを切片化しないため文脈を大切にすることができ、分析手順も明確で優れた説明力があり、結果の妥当性を高めるように工夫されている。本研究は、保護者や教師が自由記述した「連絡帳」を扱うため、文脈を理解することは極めて重要であり、質的研究である本研究の妥当性を高めるために、M-GTA を用いた。さらに、バイアスを補うために①第3者による生成した概念をチェックするという手続き②第3者の評価の2点を工夫した。

2. 実践現場からのデータ収集

(1) データの概要

本研究で対象とする「連絡帳」は、F 特別支援学校 小学部 保護者 A と担任教師とでやりとりされたものである。

(2) データの記録時期 2011 年 4 月～2012 年 3 月

(3) データ分析の手続き

分析は Table 1 の手続きで行った。手続きの STEP 1 では、「連絡帳」の文脈を損なわないように区切り分析の最小単位である概念を作成した。STEP 2 では、生成した概念を特別支援教育経験者である第3者に示し、概念を微調整した。これは、STEP 1 で得られた概念の妥当性を高めるために行った。STEP 3 では、個々の概念の関係から、上位カテゴリーグループに統合した。STEP 4 では、上位カテゴリー間関係を統合し関係図を作成した。STEP 5 では、STEP 4 で得られた関係図を第3者に提示し、それらの内容が支持されるかどうか、関係図の妥当性の評価を得た。

Table 1 データ分析の手続き

TEP	分析	手続き
1	連絡帳の概念化	「連絡帳」を文脈や意味のまとまりで区切り、抽象的な概念へまとめる。
2	第3者によるチェック	分析途中結果を第3者に提示し、フィードバックされた意見をもとに分析を見直す。
3	カテゴリーへの統合	概念からカテゴリーへと統合し、カテゴリーをさらに上位カテゴリーグループにまとめる。
4	カテゴリー間関係	カテゴリー間関係を検討し、関係図を作成する。
5	分析結果へのチェックと評価	分析結果を第3者に提示し、フィードバックを得るとともに、支持されるかどうか妥当性を確認する。

Ⅲ. 結果

1. 連絡帳の概念化 (STEP1)

STEP1では、「連絡帳」記述内容のデータを概念化した。概念化は、「連絡帳」の文脈を損なわないように文面を意味のまとまりで区切りデータとし、本研究の分析テーマに照らしながら、生活の記述に着目して概念を生成した。生成された「連絡帳」の概念は、保護者による記述では27個、教師による記述では29個となった。それぞれの概念とデータの例をTable 2、Table 3に記す。概念化の過程は、得られた概念をより上位のカテゴリーにまとめるための前段階と位置付けられた

TABLE 2 連絡帳（保護者記入）の概念化とデータの例（STEP 1）

	概念名	連絡帳（保護者）のデータの例
①	食事	白ご飯が家で初めて食べれました。味噌汁鍋ごと食べていました。
②	用便	自分でトイレにいつても何度も呼んでいました。大便是後から私が拭いています。
③	睡眠	起こしますが起きません。機嫌が悪く起きません。夜起きてビーズをしています。
④	清潔	ズボンの中に手を入れて触っています。何度も洗面所へ行って手を洗います。
⑤	身の回りの整頓	帰ってきたらすぐに玄関で服を脱いで、洗濯機に入れます。
⑥	身なり	家に帰ると全部脱いで裸でいます。姉のTシャツを着るようになりました。
⑦	健康	風邪をひいたみたいで、鼻をぐずぐずしています。ひつこく咳が出ます。
⑧	危険防止	ベランダからおもちゃを投げていました。乗り出さないか心配です。
⑨	交通安全	信号を見ていません。飛び出すのでヒヤヒヤしています。車を触ろうとします。
⑩	いろいろな遊び	シュレッターで刻んで遊んでいます。ビーズで遊んでいます。DVD見えています。
⑪	道具の後始末	棚を作っておいたら、ビーズを片付けてました。決まったところに入れ替えます。
⑫	家族	弟とケンカしてました。すぐに私に寄ってきます。姉の言うことはよくききます。
⑬	身近な人とかかわり	ヘルパーさんにあっちへ行くと言ったみたいです。機嫌悪く帰ってきました。
⑭	ことば	たたいた後「ごめんね」と言っていました。「ありがとう」とまねていました。
⑮	地域行事への参加	お祭りに連れて行きましたが、嫌がるのですぐに連れて帰りました。
⑯	手伝い	「持って行って」と言うと、台所まで持って行ってくれます。
⑰	整理整頓	モデルルームへ行くと、〇〇ちゃんだけ脱いだ靴をそろえていました。
⑱	戸締まり	鍵をかけていても自分であけて、廊下に出ていました。
⑲	掃除	細かい葉っぱなどを見つけると、拾って捨てに行きます。
⑳	後片付け	「これ、持って行って」と言えばお皿を流しに持って行きました。
㉑	金銭の扱い	お金を払うように手渡すと、店員さんに渡していました。
㉒	買い物	買い物へ行くと自分の好きなブドウを持ってきてカゴに入れました。
㉓	自動販売機等の利用	100円玉を渡すと、ちゃんと入れて、ボタンを押していました。
㉔	動物	猫が嫌いで、見ると走って逃げます。エレベーターの端にしがみつきます。
㉕	いろいろなお店	スーパーの駐車場に着いても、降りたがらないので、車で待っていました。
㉖	公園など公共施設の利用	公園のブランコが大好きです。誰かが乗っていると待っています。
㉗	交通機関の利用	電車の外をずっと見ていたようです。

TABLE 3 連絡帳（教師記入）の概念化とデータの例（STEP1）

	概念名	連絡帳（教師）のデータの例
①	食事	給食の牛乳、瓶からぐいぐい飲みましたよ。ほぼ完食しました。こんにやくもしっかり食べられましたよ。チーズパンのチーズをとって食べていました。
②	用便	時間の区切りには必ずトイレに行くようにしていますよ。
③	睡眠	4時から起きていたんですね。今日は2度寝なしでよかったですね。宿泊学習、皆と一緒に9時過ぎにお布団に入ると、10時には寝てしまいましたよ。
④	清潔	石鹸をつけると、指先だけこすっているの、手のひらも洗うように、一緒に洗ったりしていますよ。時々、ズボンの中に手を入れてますね。
⑤	身の回りの整頓	トレーナーなどをスノコの上に広げて置いたら、たたんで籠に入れてますよ。コップの向きが上を向いていたら、お友達のコップも全部下向きにしていました。
⑥	身なり	気がついたら、ズボンをぐっとあげるように言ってます。中のシャツだけズボンに入れるって難しいですよ。
⑦	健康	鼻水がでていますね。風邪、早く治してくださいね。てんかんと睡眠の関係ってあるはずですよ。今日は身体をよく動かしているの、早く眠れるといいなあ。
⑧	危険防止	玄関の鍵はきっちり閉めておいた方がいいですね。トンネルの上に寝転ぶのが大好きですが、頭から落ちないように見えています。
⑨	交通安全	上手に友だちと手をつないで、道路の端の方を歩いていましたよ。
⑩	避難訓練	静かに教室から運動場へ移動することができました。
⑪	いろいろな遊び	オレンジブロックの上に寝転んでいるので、腰のあたりをこそばすと、「もう一回」と言って、ニコニコしていました。三輪車が好きになりましたね。
⑫	道具の後始末	「お片付け」と声をかけると、すぐに片付けていましたよ。「あっちのボールもお願いね。」と指さすと、走って取りに行き片付けてくれました。
⑬	教師・友だちとのかかわり	離れていても私を見つけて、横に座りに来ます。身体のだこか触れた状態で隣に並びます。安心するのでしょうかね。耳を触っては顔をのぞかして見えていますよ。
⑭	ことば	同じ言葉を繰り返したりして、楽しんでいますよ。時々、場面にあった言葉を突然言って、周りを驚かすことがありますよね。
⑮	集団の参加	「集合」と合図をすると、遠くからでも走って皆のところへ集まってこられますよ。周りの様子を見て、近寄ってきたり、よく見ておられますよ。
⑯	共同での作業・役割分担	作業するだけの量を分けておくと、終わりまでしっかりと活動されました。「電気」と声かけすると、教室の電気を切ったりつけたりしてくれていますよ。
⑰	整理整頓	棚にある本が斜めになっていると立てかけたり、ロッカーの籠が少しゆがんでいたら、端に寄せるように整えたり、とても助かっていますよ。
⑱	掃除	新聞紙をまいておいたら、それを目印にほうきで集めていますよ。両手で箒が持てるようになりました。机のゴミもすぐにゴミ箱へ捨てて行かれます。
⑲	後片付け	お椀、お皿など、ちゃんと区別して返却していますよ。すのこにあがるときは、必ず靴を揃えています。きっちり靴は揃えておられますよ。
⑳	きまり	ペアの友達と一緒に手をつないで給食を取りに行っています。
㉑	日課の見通し	今日は急に音楽になりましたが、混乱することもなくプレイルームに行きましたよ。「プール」っていいながら水着に着替えていましたよ。
㉒	金銭の扱い	小銭を財布から出すと、ちゃんと自動販売機の投入口に入れていましたよ。お店の人からお釣りをもらおうと握りしめていましたよ。
㉓	買い物	写真カードをもって、買い物に行きました。ニンジンを見つけて、一袋手にとって籠に入れてました。果物をじっとみては、先生に確認していました。

②④	自動販売機等の利用	ボタンを指さすまで、待っていましたよ。運賃のところを指さすと、ボタンをゆっくり押ししていました。おつりと切符を片手でとっていました。
②⑤	自然	落ち葉を見つけると、走って行って拾っています。竹がさらさら音をたてるのを、目をつぶって聞いているようでしたよ。台に上がって風に当たっていました。
②⑥	季節の変化と生活	上着を渡すと着ていますが、教室に入るとすぐに脱いでいます。Tシャツだけでも汗でびしょりですね。上着暖かそうですね。
②⑦	いろいろなお店	駅まで歩いていきました。スーパーの中を籠を持って歩いていましたよ。
②⑧	公園など公共施設の利用	滑り台を滑っては、また黙々と階段を上っていました。
②⑨	交通機関の利用	電車に乗ると窓から外を眺めていましたよ。改札口はとてもスムーズでした。切符をどこに入れてしまったのか、なくしてしまいました。

2. 第三者によるチェック (STEP 2)

上記で得られた概念が、文脈から意味のまとまりを持って適切に分類されているかどうかについて、第三者にチェックを依頼した。示された概念に対しては、ほぼ支持された。

3. カテゴリーへの統合 (STEP 3)

STEP 1, STEP 2 で得られた分析結果を踏まえて、カテゴリーへの統合を行った。概念を統合したカテゴリーを Table 4、Table 5 に示す。概念から保護者の記述内容は 9 個のカテゴリーに統合し、教師の記述内容は、10 個のカテゴリーに統合した。

TABLE 4 保護者の記述内容のカテゴリーへの統合 (STEP3)

カテゴリー	カテゴリーに含まれる概念
1. 基本的な生活習慣	①食事/②用便/ ③睡眠/ ④清潔/ ⑤身の回りの整理/ ⑥身なり
2. 健康・安全	⑦健康/ ⑧危険防止/ ⑨交通安全
3. 遊び	⑩いろいろな遊び/ ⑪道具の後始末
4. コミュニケーション	⑫家族とのかかわり/⑬身近な人とかかわり/ ⑭ことば
5. 集団行動	⑮地域の行事への参加
6. 手伝い・仕事	⑯手伝い/ ⑰整理整頓/ ⑱戸締まり/ ⑲掃除/ ⑳後片付け
7. 金銭	㉑金銭の扱い/ ㉒買い物/ ㉓自動販売機の利用
8. 自然	㉔動物
9. 店・公共施設・交通機関	㉕色々なお店/ ㉖公園など公共施設の利用/ ㉗交通機関の利用

TABLE 5 教師の記述内容のカテゴリーへの統合 (STEP3)

カテゴリー	カテゴリーに含まれる概念
1. 基本的な生活習慣	①食事/②用便/ ③睡眠/ ④清潔/ ⑤身の回りの整理/ ⑥身なり/ ⑥季節の変化と生活
2. 健康・安全	⑦健康・安全/ ⑧危険防止/ ⑨交通安全/⑩避難訓練
3. 遊び	⑪いろいろな遊び/ ⑫道具の後始末
4. コミュニケーション	⑬教師・友だちとかかわり/ ⑭ことば
5. 集団行動	⑮集団の参加
6. 手伝い・仕事	⑯共同での作業・役割分担/ ⑰整理整頓/ ⑱掃除/ ⑲後片付け
7. 日課・見通し	⑳きまり/ ㉑日課の見通し
8. 金銭	㉒金銭の扱い/ ㉓買い物/ ㉔自動販売機の利用
9. 自然	㉕植物
10. 店・公共施設・交通機関	㉖色々なお店/ ㉗公園など公共施設の利用/ ㉘交通機関の利用

4. カテゴリー間の関係 (STEP 4)

STEP 4では、TABLE 4、TABLE 5で示された各カテゴリー間の関係を関係図 (Figure 1) として表した。

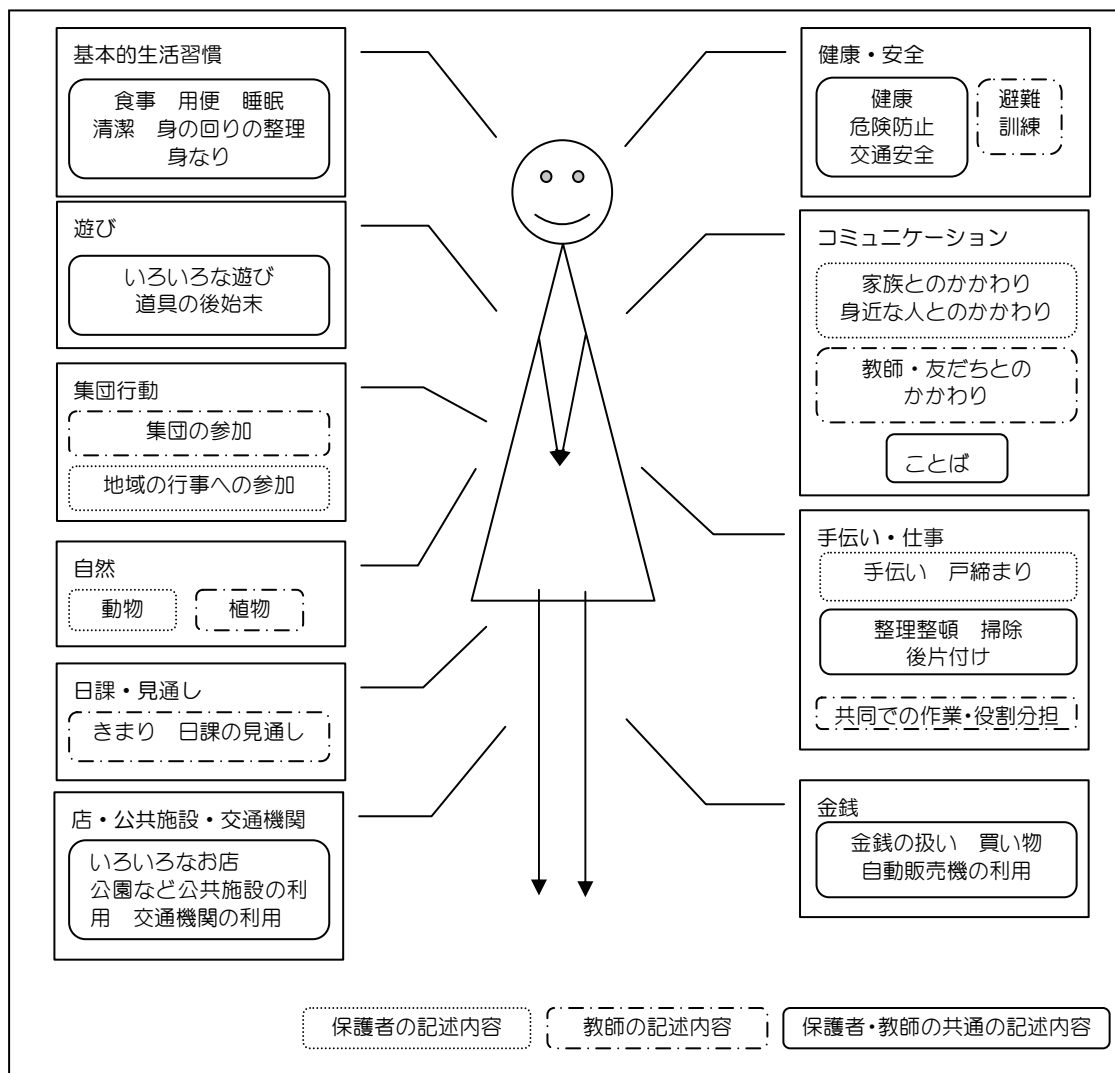


Figure 1 保護者と教師の記述内容の関係

5. 第三者による分析結果への評価 (STEP 5)

分析結果を第三者に示し、関係図が支持されるかどうか確認した。

IV. 考察

本研究で見いだされた結果をもとに、「連絡帳」がどのような役割を果たし、今後どのように活用できるかについて考察する。最後に、本研究の意義及び課題について述べる。

保護者と教師の記述内容を Figure 1 のように並べると、子どもの生活実態がカテゴリー毎に明らかになることがわかる。またその生活実態は、家庭からの情報と学校からの情報が合わさっており、より具体的により詳細に記されている。「連絡帳」の記述内容を、本研究のように分析、整理することができれば、その内容は、子どもの生活実態記録として、十分活用できると考えられる。

また保護者と教師の記述内容には、共通したカテゴリーが9個あった。これは「連絡帳」が、一方通行的な情報の伝達手段として活用されているのではなく、家庭や学校での子どもの様子や、その様子をどのように捉えたかについて、相互に情報を交換する手段として活用されていることを示している。「連絡帳」では、保護者が家庭の中での場面を捉え、そこで観察した子どもの状態に関する情報に対して、教師は、学校でも同じような場面で同じ状態であるとか、違った状態であるといったように返答したり、その時の子どもの状態から、次の学習ステップを、保護者と教師が一緒になって考えたり、指導・支援がどうだったかを、一緒に振り返ったりしている。「連絡帳」を通じて、家庭と学校は共同で子どもの生活実態を捉え、必要な指導・支援の方法を考えたり、将来の行動を予測したり、指導・支援の成果を評価したりしていることがわかる。このような相互の情報交換、情報共有や共同作業を継続して行うことは、互いの信頼関係をよりよくゆるぎないものとし、子どものより正確な実態情報に基づいた有用な指導・支援の手がかりを見いだしていけると考える。つまり「連絡帳」は、家庭と学校とが連携して指導・支援を進めていくための有効なツールとして活用できると考えられる。

さらに、家庭と学校、双方からの情報を Figure 1 のように総合的に並べ、その内容を見ていくと、保護者と教師がどのような視点で子どもを捉えているかがわかる。「連絡帳」は、子どもの生活場面の中で、保護者や教師がその子どもに対して気になった状態や事柄を抽出して書かれたものであり、つまりそれは、保護者や教師が今どのような観点で子どもを捉えているかという保護者の視点と教師の視点を表している。「連絡帳」は、毎日更新され、その情報は蓄積されていく。この蓄積された情報をたどれば、保護者や教師が、どのような指導観や支援法でもって子どもと接しているかといったそれぞれの特徴までも捉えられると考えられる。このように、「連絡帳」の情報の蓄積によって、保護者と教師それぞれの指導観や支援法の特徴が把握できるのであれば、子どものよりよい成長のために、保護者や教師は何をどのように子どもを支援すればよいか、その方法も予測することができるであろう。つまり「連絡帳」は、保護者や教師の支援方法を予測するためのアセスメント・ツールとしても活用できると考えられる。

以上のように、本研究では、「連絡帳」の役割と、その記録の今後の活用の仕方について検討してきた。特別支援教育において、家庭と学校との連携は非常に重要な役割を持っている。教育基本法第13条にも「学校、家庭及び地域住民その他の関係者は、教育におけるそれぞれの役割と責任を自覚するとともに、相互の連携及び協力を努めるものとする。」とある。特に特別な支援を必要とする子どもの保護者は、子どもの療育へ生涯にわたり携わると共に、子どもの代弁者としての役割も持つため、家庭と学校の連携を効果的に進めることが教育の連携の鍵を握ると言っても過言ではない。本研究は、その家庭と学校の連携を構築する一つの方法として、「連絡帳」活用の可能性について考察した。今回の結果を基に、今後は誰もが簡単に「連絡帳」の情報を活用できる方法の検討とその効果の検証を行っていきたい。

付 記

本研究の一部は、「財団法人パナソニック教育研究財団 第38回実践研究助成」と「平成24年度科学研究費助成事業（奨励研究）」を受け実施した。

文 献

宮武宏治・高原望・足立由美子（1989）：障害児教育で使用される「連絡帳」に関する調査研究．特殊教育学研究，27（2），pp67-73.

木下康仁（1999）：グラウンデッド・セオリー・アプローチ—質的実証研究の再生—．弘文堂

木下康仁（2003）：グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究の誘い—．弘文堂